18禁
はあと饅頭ファ
鼻血以外で出血中!

■ Hanaji Igaide Syukketutyuu! ■
■ Heart Manju Mania ■

■はじめに■

はじめまして！ または、まいどどうも！
『はぁと饅頭マニア』の本を手にとって下さって、
ありがとうございます。

今回は、『かりん』の本です。
以前、和南城ジョアンナさんにお呼ばれして
『影崎先生に捧ぐアニメ化記念本』に二人で参加したのですが、
あらためて、ちゃんとした本を作りたい！ ということで実現しました。
ちゃんとエッチな本を！
最近、本当にパロディ描きたくなるような作品が少ないのですが、
これはキャラクターの良い貴重なラブコメ漫画ですよー。
元々、逸樹が１巻から買っていて、私は後から影響されたんですが
その時の印象は「ゲームの原画さんで、ちゃんとキャラ動かせて
面白い漫画描けるのはスゴいなぁ」でした。ほんと失礼しました…(汗)

いやーしかし、こればっかりになってしまうんですが、思っていた
以上に時間が無かったです。予定では仕事がひと段落して、イイ感じで
取り掛かれるはずだったんですが…結局こうなってしまうんですね。
てか、今ギリギリです。印刷所様、ごめんなさい(汗)
せわしなく作ってる分、至らぬところもあるかと思いますが、
いつも以上に作品への愛を込めて描いてます。原作と同じように、
果林や杏樹を可愛く感じてもらえれば嬉しいです！

ではでは、よろしくお願いします。
また後でお会いしましょー。

はぁと饅頭マニア　茉森 晶

『前回までのあらすじ』色々あって恋人どうしになったかりんと雨水。そしてとうとう一線を超える時が…。

かりんとラブラブHまんが。

亜方逸樹

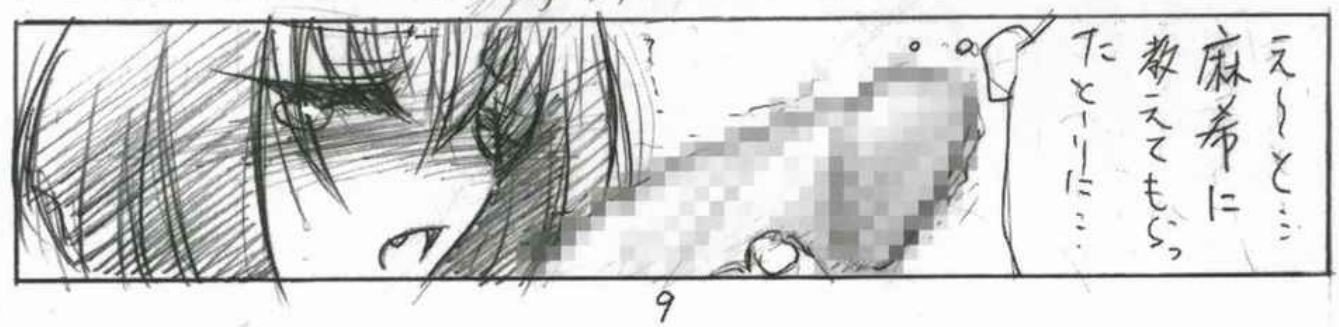
月あこ
はっ
ぶるる…
はっ
ーあか
真紅！
ひあっ！
ばるる
大丈夫か？
あっうん！
そのここ
気持ち良すぎて
そうか
それならいいんだけど
そ、それより
雨水君も
感じてほしい…
いや！
オレはべつに
それに…
7

なんてゆーか こうしてるだけで 気持ち良いし
ぎゅっ
ひえっ
すごく幸せな気分になれる
それは ここ 私も 一緒だけど でも
もじっ
私が ここ 雨水君に してあげたいから ここ
ひゃ

ま…真紅？
スッ

はっ…はずかし
はぁ
はぁ
じ——
すごい…ドキドキしてきた

ひぁっ!!
おおきっ——!!


え～と…麻希に教えてもらったとーりに…

ん……っ
む……っ
ちゅっ
ちゅっ
んっ……っ
んん……む
ちゅっ
ちゅっ

雨水君に…
もっと感じてほしい…
はぁ
ん
ん
ぴくっ
はぁ
ふ
うっ
キバが当たって
ん…
ぐぐっ
ちゅー
4。
4。

あっ ちょっ まっ 真紅っ!!
ん
42
ぐっ
ぐっ
ぐっ
はわっ!
あわわわ
んっ
ぐー
ん
はぁ
はぁ
んん
ちゃる
はぁ
ぜっ

あ!!の、飲んだのか？

はっ！

あ、あはははは

ついっ、とっさにっ

でっても！おいしかったよ!!

ごっ、ごっ、ごっ、

雨水くん…私…その…初めてだし…
うまく出来るかわからないケド…
こびっ♡
雨水君に最後までしてほしい…
ぶるぶる
ぶるぶる

ゴソゴソ
あっ…それ？

ん？ああ…これはこの前…

備えあれば憂い無し！

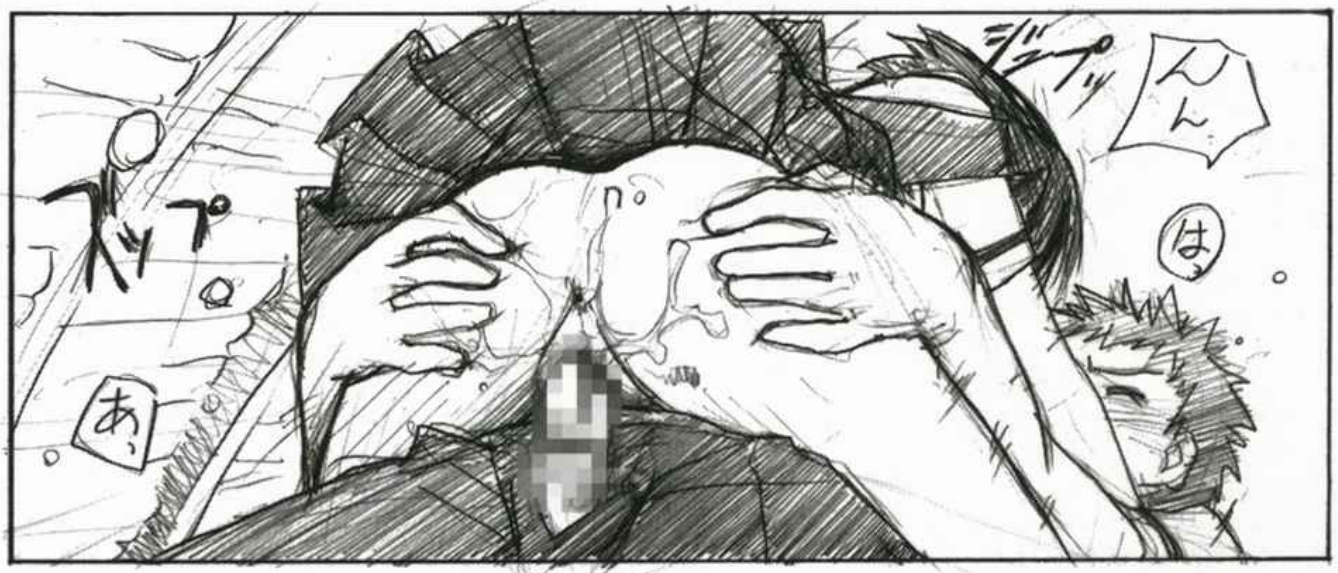
ってか時任が…
ち、あはははははは
まこ麻布ってばこ…

ははちゃんとヒツしろよ！
父さん!! 今ならあんたのこと許せる気がするヨ！

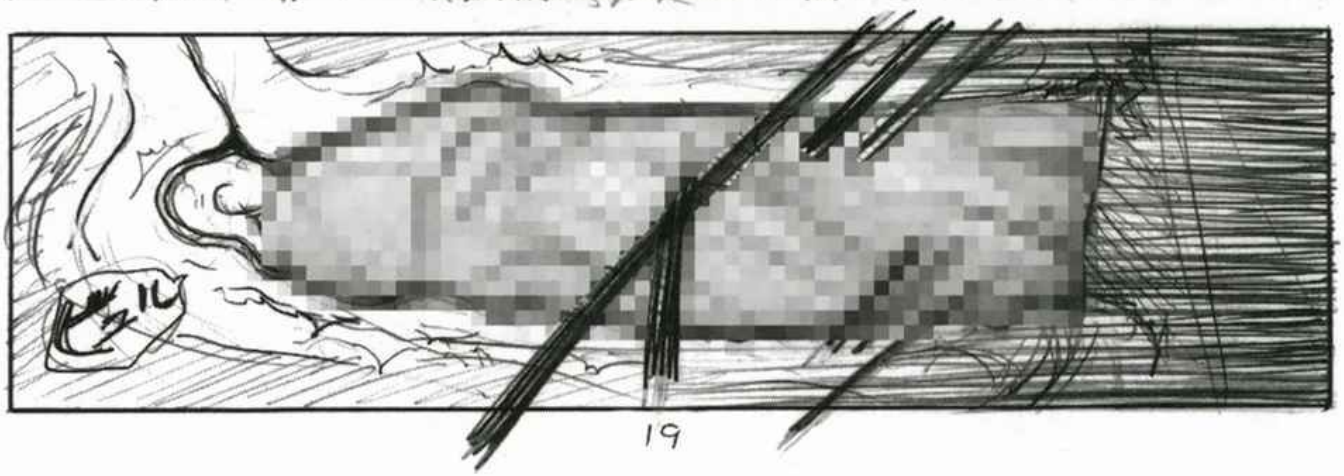
ここここでいいのかな？
はあ
はあ
うぅん
いっ
ぬる
ぬる
ビクッ

はっ
ひぁっ
はっ
あっ
はっ
雨水君のでお腹がいっぱい……
あ
ズプッ
ヌッ
ヌッ
ぃあっ
ぃにゃっ
ズッ
ぁ
ぁっ
ぃ
ぁ
ぁ
ぁ

はっ
あっ
ん!
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
はっ!
はっ!
あっ…おっ…おくにあたってー!


ん
は
ぷっ
あ

用
ん
チュン
はあ
うっ雨水君
雨水君!!
あっ
まっ
真紅!!


ビル

あっ

あっ あっ はあ あっ!!

くっ

ぎゅるル

!?

んっ

ぴくっ

な…なにか…雨水君の…ぜんぜん小さくならないね…

あっ…わっ! すっすまん! …ここその…しめつけが…きもちよくて…

えっ…そのこと良かったら もう一回…してくれて…も

ま…真紅…

あっこら はんん

おわり。

まいどー 逸樹でございます。こんかいは、かりんまんがかきました。
いやーまいどのことですが、スケジュールがばかったです、て…とうぜん
いまのじてんでげんこうぜんぶそろっていませんが…まーなんとか
なりますよね?(きくな) しかしまーなんですねー…ネームきらなく
てもまんがってできるもんなんですねー、て、ごめんなさい、また
したがきからはじめました…んでもってラフでしあげました、そざいの
しんせんさをごしょうみしださい。
ところで、さいきんとゆーかまえからですけど、やはりラウがいりますよね?
そんなあなたに、「かりん」おすすめ! ずいぶんほきゅうさせてもらいました。
かげさき先生ありがとうございます。できればこれからもよろしく
おねがいします!! あとラウ好きなそこのあなた! ぜひわたしにおすすめ
まんがおしえてください…おねがいします、ラウがにうえてます。
しょうじょまんがとか、かいたくしないとだめですかね?
かりん…ちちでかいですね。ふだんかきなれてないんで、うまくかけ
てるかしんぱいです。どーですかね? 2006.08.05 逸樹。

「……困ったわ」
陰鬱な曇り空しか見えない窓を見つめながら、杏樹はそう呟いた。とは言っても、その表情は微塵も困ったようには見えない。このクールリトルレディが慌てふためく顔を見せるとしたら、それはどんな時だろうか。慌てふためく行為に関しては右に出る者がいないほどのパニクリストを姉に持つ杏樹なのだから、どこかにそんな顔も隠されているかもしれないが――。
「でも……やるしかないものね」
相変わらず冷静な顔をしているが、杏樹は本当に焦っていた。
今回の事件は、いつものように古びた人形を拾ってきたことから始まった。そのマリオネットは可愛らしいお姫様の姿を模していたが、案の定、ブギーと張り合えるほどの強い悪霊を宿していた。杏樹は抑えつけようと集中したが、それによってブギーの制御が緩んだ。奴はブギーをそそのかし、二体の力で杏樹をはね除けたのだ。
そう……回収しなければならない悪霊は、二体なのだった。
「とにかくブギーくんを先に……ううん、まず煉兄さんに会わないと」
気怠げに溜息をつき、出来るだけ音を立てないよう、兄の部屋へと歩き出す。
ヘンリーとカレラは寄り合いに出ているので、二、三日は帰ってこない。果林は試験勉強ということで、学校の後は麻希の家へ行くと聞いている。そんな状況のため、杏樹には甘い煉は、夜遊びに行く予定も入れず家にいるはずだった。陽も落ちてきて、そろそろ部屋から出てきそうなものだが、声を出して呼ぶ訳にもいかない。
――兄さんなら大丈夫。
心の中で自分に言い聞かせながら廊下を曲がったその時、視界の端に人影が映り、杏樹はハッと息を呑む。
「はう……ッ！」
大きなシャボン玉が弾けたような音を最後に聞き、杏樹の視界が闇に染まる。崩れ落ちるその細い体を受け止めたのは……ほかならぬ兄の腕だった。
ぼんやりとした夢の中、杏樹は幼い姉に会っていた。
「あうう……どうしよう、落ちてこないよぉ」
夢といっても、ほぼ記憶の再現だった。投げたボールが木の上にかかり、果林は涙目でおろおろしている。確かに昔見ているシーンのはずだが、杏樹自身に再現という自覚はなく、当時と同じように行動してしまう。ただ、果林の涙を止めたい気持ちだけで。
「ちょ……杏樹！　危ない、危ないよっ！」
運動神経のいい杏樹は木に登り、ボールを下へ落とした。しかし、やはり現実と同じようにバランスを崩し、その小さな体はまっさかさまに落ちるのだった。
「きゃあ――ッ！　杏樹――ッ！」
ビクンと体が跳ね、美しい銀髪がサラリと流れる。夢から醒める特有の感触。杏樹は現実へ帰ってきた。
「ん……っく？」
薄暗い部屋の中、ベッドの上にいるらしい。記憶が交錯する。
違う……さっきのは昔の記憶。私、気を失って――
「気がついた……みたいね」
声を聞き、一気に意識が戻ってくる。一瞬では理解できない疑問が溢れ返り、杏樹は体を起こす。
「ッ……いたっ？」
両手首をまとめて頭の上で、足首はそれぞれベッドの外側で、紐のようなもので縛られていた。ベッドに縫いつけられた状態で、仕方なく首だけを起こし、声の主を確認する。
「にい……さん？」
九割違うと思っていても、確認してしまう。自分をいつも大事にしてくれる兄が、こんな事をするはずがない。それに――

「どう？　最愛の肉親に裏切られた気分は」
そう、格好悪いところなど絶対に見せないあの兄が、力いっぱい女言葉で話している。通常では考えられない一発芸に、杏樹は思わず口元を緩めてしまう。
「……ふふっ」
「ちょっと！　何がおかしいのかしら？」
おかしいに決まっている。だが、兄の名誉のため、杏樹は含み笑いを飲み込んだ。
「別に……。それより、早くそこから出なさい。今なら、私から兄さんにフォローしてあげるわ」
「……なに涼しい顔してるのよ。自分の立場、わかるでしょ？」
煉は苛立ちに顔をゆがめ、突然、漆黒のスカートをシュミーズと一緒に捲り上げた。
「……何をしているの？」
「まだ学校では習ってないかしらね。今から……おまえは実の兄に犯されるのよ。未発達なこの小さな穴が、男のペニスでこじ開けられ、鮮血にまみれるの」
フリルがあしらわれた可愛らしい純白のショーツの上から、兄の指がグリグリと谷間をなぞる。
相変わらず煉の声で女口調は笑えるが、その内容はとんでもないものだった。
「……ふう」
普段から兄の話を聞かされている杏樹に、その意味が解らないはずはない。だが……杏樹は怯える表情などカケラも見せず、やれやれとでも言うようにスンと鼻で溜息をつく。
「やっぱり意味が解ってないようね。ふん、精神的なショックが少ない分、ありがたく思いなさい。痛くて泣き叫ぶことになるのは変わらないんだけど」
ショーツの生地を裂け目に押し込み、煉の顔の悪霊はいやらしくニヤける。ピクンと少しだけ杏樹の眉が動いた気もするが、気のせいで済んでしまうレベルか。
「あなたは……その痛みを人に与えることで、自我を保っているのね」
「な……解ったような口を利かないで欲しいわね！　子供のくせに、アタシを封印しようだなんて……十年早いのよ！」
鋭い爪が胸元を引き裂き、ワンピースの生地が悲鳴を上げる。家族でもまず見ることのない白い雪原に、桃色の小さなマーキング。ツンと尖ったしこり程度の乳房は、部屋の冷気に触れ、一瞬震えるように揺れる。
「あら……子供だなんて言ったけど、ちゃんと女の体になるための準備を始めているのね」
小さな子供をあやすような表情で戯けるのは、やはり、兄の顔であり……杏樹はさすがに、少し気持ち悪いと思う。
「さっきは何も言わなかったけど……五年生にもなれば、性教育だってあるわ。あなたの過去、聞いてあげるから話してごらんなさい」
平然と言ってしまう少女にやはり苛立つのか、煉は怒りを押し込めるような引きつった表情で、ベッドの上へ膝を乗せる。
背中からギシリと軋みが伝わってくる。足下から這い上がってきた煉は、顕わになった胸のすぐ横に手を沈ませ、いやらしい視線で見下ろす。それでも杏樹は、冷静な視線を煉の顔に送り続ける。
「恥ずかしくないの？　兄とはいえ、男の前で……」
「今、見ているのは……女性のあなただけ。それに……兄さんは、私なんかをそんな対象に見たりしないわ」
自分の言葉にハッとして、自嘲気味に苦笑い。そして、杏樹はまた溜息をつく。
私……何を言っているんだろう。まるで、何か変な希望でも抱いているかのような言い方をしてしまった。
人間との生活の中でも特別溶け込んでいなかった杏樹が、恋など知るはずもない。そんな杏樹にとって煉という存在は、無意識のうちに

一番それに近いものになっていたのだ。
——昼の世界とはどうせ決別するのだから、人間に恋するなんて馬鹿げたことのないように。
何度も聞いてきて、その度に頭に浮かんでしまう疑問。じゃあ、兄さんとならどうなんだろう？　人間達の世界と同じように、やっぱり一族の中でつまはじきにされてしまうんだろうか。
「ふふん……じゃ、こういうのはどうかしら」
杏樹の表情を分析していた悪霊は楽しそうに声を弾ませると、グッと瞼を閉じる。すると、煉はビクンと体を弾けさせ、辛そうに眉根を寄せる。
「な、何をするつもり？　兄さんを苦しめないで」
「ふふ……慌てないの。今、兄さんの意識を戻してあげるわ」
「どういう……こと？」
杏樹の表情に、明らかな動揺が混ざり始める。色々なケースを想像するが、その度に揺らぎが大きくなっていく。
「アタシくらいになるとね、ただ取り憑くだけじゃなく……人間を操ることも出来るのさ。そう、それこそマリオネットのようにね」
それだけ言うと……煉の頭が一度糸が切れたようにガクンと頷く。そして、眠りから覚めるように、ゆっくりと瞼が開いた。
「くッ……な、何だ？　ここは……」
「煉……兄さん……なの？」
杏樹は怯えるような表情で、コクンと息を呑む。
「杏樹……って、お前？　なんて格好……」
「う、嘘……いやあッ！　み……見ないでぇ！」
聞いた煉はもちろんのこと、言った本人に憶えがないくらいの声だった。恥じらいを知る、本来の11歳の少女の、可愛らしい悲鳴。
「うお……わ、悪い！　って……体が動かねえ？　何だ、この力は！」
体が自由にならず、煉はギリリと牙を軋ませる。目の前で、幼い妹が穢れのない肌をさらし、真っ赤になって顔を背けている。というのに、自分は目を伏せることもできず、言葉を発する事しかできない。
「ふふ……どう？　杏樹ちゃん。やっぱり恥ずかしいみたいね。兄さんなら、そんな対象に見ないんじゃなかったの？」
今度は煉の口からではなく、マリオネット本体から声が発せられていた。緩んでいた元の封印が解かれ、新たな封印が施される途中だったため、彼女は自分の力をフルに発揮していた。
「てめえ……寝ているうちに何かしやがったのか。俺の体を玩具にするとは……覚悟はできてるんだろうな？」
「凄んだってダメよ。おまえはすでにアタシの操り人形。そして、おまえの役目は……杏樹ちゃんを滅茶苦茶に犯して、素敵な悲鳴を部屋中に響かせることなのさ」
「……ぶっ殺してやる」
自慢の眼力を敵に向けることもできず、瞼を閉じることもできず、煉は歯噛みする。杏樹は顔を背けたまま、細い肩をふるふると震わせている。そんな無抵抗の杏樹の乳房に、初めて男の手が触れる。
「ひあ……んっ！」
ぷっくりと膨らんだ小高い丘を、抓むような仕草でクリクリと転がす。煉の指が電極であるかのように、杏樹の体がビクビクと弾け、手首と足首にギシリと紐が食い込む。
「あ、杏樹……くッ！　もうやめろ！　てめえ、何がしたいんだ？　こんなことをして何の意味がある？」
顔の筋肉を強張らせ、必死に抵抗しながらも、きめ細かい肌の手触りにドクンと煉の胸が高鳴る。10台から50台までのストレス持ちの女性なら守備範囲——そんな煉にとって、杏樹は十分に条件を満たしていた。しかし、実の妹を抱くことなど考えもしなかった。煉にとって、セックスを楽しむ相手は、イコール愛のない者なのだ。愛する妹を傷つけることなど、あってはならない。人間の常識とはまた別の、それは彼なりの不文律であった。
「ふふふ……『そんな対象に見られない』って杏樹ちゃんは言ったけ

ど、兄さんはちゃんとあなたを女として見ているみたいよ？」
「え……？」
人形の言葉に杏樹はハッとして瞼を開けると、おそるおそる顔を上げる。自分の上で四つん這いになっている兄の股間では、確かにムックリと膨張したものがズボンの前を押し上げていた。
「バ、バカ、見るな！　これは……そういうことじゃ……ッ！」
「……兄さん、私の体に触れて……興奮しているの？」
「ぐっ……く……」
顔を真っ赤にして耐える煉というのも、なかなか見ることはできないだろう。数秒思考し、言葉を紡ぐ。苦しげに、絞り出すように。
「俺から見れば……お前は十分魅力的な女だ。しかし、俺はお前を悲しませるようなことをする訳には……ッ！」
その時、杏樹の唇が珍しく微笑みの形を見せた。そして、煉にだけ伝わるように『抱いて』と動く。
「なっ……お、おい、杏樹っ？」
思いもかけない杏樹の意思表示。煉は動揺しつつも、胸にズキンと熱いものを感じてしまう。
「ふふん……どう抵抗しても、抜けられないでしょ？　ほらほら、初めて胸を愛撫される感覚はどうかしら」
そう言い終わった瞬間、煉の指がキュウッと両の乳首を捻り上げる。杏樹の眉に力が籠もり、『ひっ』と短く高い悲鳴が漏れる。
「や、やめて……やっぱり嫌よ。私、まだそんなこと……早すぎるわ」
涙を溜めた弱気な表情で、人形を見つめ哀願する。人形はそれを聞き、嬉しそうに笑み声を漏らす。だが、それが演技であることを、煉は一目見て判ってしまう。
「くふふっ！　やっと真剣に考えるようになってくれたかしら？　そうよ……そうやって必死になってくれればすぐ終わるんだから」
楽しそうな声に合わせ、煉の手の動きはさらにいやらしく変化していく。コリコリと、痛みにならないギリギリのところで乳房を弄ぶ。肋骨の浮き出た脇腹を、へそのくぼみを、腰骨のなだらかなラインを、手のひら全体で撫で……その感触に紛れるように、もう一方の手がいつの間にか太ももを付け根へと這い上がっていく。
「や、やめろ……おい、お前！　後でどうなるか……ただ消すだけでは済まさねえぞ？」
煉は本気も本気で抵抗の声を上げる。が、杏樹は――
「いや……兄さん、やめて！　私……初めてなのに。兄妹……なのに」
震える声で言いながら……人形に見えない角度を考えながら、にこっと小悪魔の笑みを見せた。
「ちょっ……マジでヤバいだろ！　やり過ぎだ、やめろ！」
「くふふふっ！　誰がやめるもんですか。お前は……嫌がる妹をボロボロになるまで犯すのよ！」
煉の言葉は、言うまでもなく半分は杏樹に対してである。杏樹はそれに対し、あらためて兄想いな優しげな笑みを浮かべる。
「兄さん……や、やめ……てぇ！」
才能ある妹だとは思っていたが、自分の専門分野とも言えるジャンルで主導権を握られるとは。末恐ろしい小さな姫君の視線を受け、煉は背筋にゾクリと涼しげなものを感じずにはいられない。
「んく……ふッ！」
その部分に指が触れた瞬間、さすがの小悪魔も眉を八の字にして震えてしまう。大人びた子だといっても、その部分を触れられるということは、少女にとって特別すぎる行為だ。
「ふふ……いいわぁ、その表情。女の子はみんな、辛い思いをして処女を失うべきなのよ。もっと……もっと怯えなさい！」
人形はうっとりとした声でクスクスと笑い、煉を操っていく。煉の指が美しい縦筋にめり込み上下する。うっすらと染み出た粘度の低い蜜が、谷間を潤していく。
「くぅ……やっ……は、恥ずかしい……くふっ！」
どこまでが演技なのか、煉ですら判らなくなっていた。だが、羞恥

によって火照った頬だけは、演技で隠せるものではないものだった。
「うく……ね、ねえ、もうやめて。どうして同じ女にひどいことをするの？　生前、何があったかは知らないけど……」
「……杏樹ちゃん、さっき解ってたじゃないの。アタシは……処女の娘に自分と同じ痛みを与えることで、この世との繋がりを保っているのよ」
お約束とばかりに、人形の中の悪霊は語り出す。だが……その間にも、煉の手は止まることなくヌルヌルと執拗に裂け目をなぞる。やりきれない表情の煉に、杏樹は目配せで合図する。悪霊を封印するには本人の望むままにさせるべきだ、と言うように。
すべてのことを手のひらの上で動かしているようだが……その水面下、杏樹は必死に快感に耐えていた。
兄さんからの情報では、未発達な性器はそれほどの快感を生まないかと思っていた。なのに……この感じは何なのだろう。極力顔に出さないようにしているけど、胸の中をたまらなく熱いものがザワザワと駆けめぐる。これは……私が人間とは違うということなのだろうか。
「何人もの男に抑えつけられて……代わる代わる犯されたわ。泣いても叫んでも、男達は喜ぶばかり。アタシは……永遠に続くかという痛みを感じながら、ただ叫び続けたの」
表情は変わらないが、どこか寂しそうな顔で人形は俯く。
「ふん……だからって、他の女を同じ目に遭わせる理由にはならんな」
人間の男達に湧き上がる怒りを覚えながらも、煉は目の前の杏樹をどうやって救うべきか考えていた。
「理由なんて、どうでもいいのよ！　一人でも……アタシと同じように痛みを感じる娘の顔を見ることができればね！」
煉の体が起き上がったかと思うと……なめらかな動きで服を脱ぎ始める。熱を帯びた頭でぼうっとそれを眺めていた杏樹は、ハッと我に返り顔を背ける。
「や、やめろ！　いや……頼む、やめてくれ！　妹は……妹だけは許してやってくれ！」
プライドを捨てて懇願する煉の声に、人形は無表情で答える。そして……その懇願をあざ笑うかのように煉の体は勝手に動き、ピッタリと閉じた合わせ目に、凶悪な銃口を押し付けた。
「や……やめろぉ――ッ!!」
口から出る言葉とは裏腹に、煉は体重を前へ押し出す。見えない穴を求め、亀頭が柔肉を掻き分けていく。ただの窪みにしか思えない膣口に辿り着き、無理矢理に押し広げる。ベッドに固定された杏樹はずり上がることもできず、ふるふると頬を震わせながら、ただその瞬間を待つ。
たぶん……まだ先端が入ってこようとしてるだけ。それなのに、股からお腹までを裂かれているように感じる。いけない……痛みのことしか考えられなくなっている。もしかして私、今すごい顔で歯を食いしばっているかしら。兄さんは、どんな顔をしてるだろう。恥ずかしくて、目を開けられない。でも……一生で一度のことなのよね。初めての人の顔を……ちゃんと見たい――
恐る恐る瞼を開ける。と……一瞬力が抜けたのか、ヌルリと一気に亀頭全体が入口に滑り込んだ。
「はぐ……うう～ッ!!」
指先から髪の先まで、白い電流が弾けるのを杏樹は感じていた。キツく細めた瞳が涙で滲み、兄の顔がぼやける。意識を逸らそうと考えるが、どうしても上手くいかない。そうしている間にも、肉棒は内部の粘膜をジリジリと擦り上げていく。
「ひぃ……んくッ！　は……はふ……ぅ……」
失神してしまうのではないかという痛みの渦の中、フィルター越しに見る兄の表情は、すべてを失ったかのように辛そうだった。
「に……いさん……そんな顔しないで……っ！」
「杏樹……すまん……俺は……」
泣きそうな兄の瞳に、杏樹はクスッと小さく吹き出した。

「私なら……大丈夫よ。とっても痛いけど……いつかは感じるものだもの。それなら……兄さんにしてもらって……不満はないわ」
「あ、杏樹……お前……くッ！」
煉の顔が快感に歪む。突然、その腰が前後し始め、肉のぶつかり合う音が見つめ合う二人を引き裂いた。
「んぐぅ……い、痛い……ッ！」
「な……何よ何よ！　何いい雰囲気になっちゃってるのよ！　アタシは……我慢できない痛みに泣き叫んだり、喪失感に絶望する顔が見たいのよ！　どうして……どうしてっ！」
人形はカタカタと震えながら、ヒステリックな声を響かせる。そのテンションに引きずられるように、煉の腰はスピードを上げていく。
二人の距離がゼロになるたび鮮血の赤が弾け、透き通るような白い肌に細かな水玉が貼り付く。さすがの杏樹もポロポロと涙を落とし、ただただ襲い来る激痛を噛みしめる。
「そうよ、もっと泣きなさい！　大切な処女を望まない形で奪われ、謂われのない痛みを感じて、怒りの言葉があるでしょう？」
「はっ……ふっ！　う……い、いいえ……あなたには……感謝しなければいけないかも……ッつ！」
腰を打ち付けられガクンガクンと全身を揺らしながら、杏樹は人形に向けて涙でグシャグシャの笑顔を見せる。
「痛みは……同じかもしれないけど……望まないかどうかは……あなたの勝手な思い込みじゃないかしら？」
「そ、そんな……じゃ、不幸なのはアタシだけってことじゃないの！」
人形の首が、ねじ切れそうな勢いでブンブンと振られる。が、ハッと何か気付いたように顔が上がり、再び挑発するような声に戻る。
「性教育を習ってるなら、次の段階がどういうことかも判ってるわよね？　杏樹ちゃんは……もう初潮は済ませたのかしら？」
「……それは……秘密……よ」
目を逸らし恥じらう表情を見て……人形は嬉しそうにカタカタと鳴る。
「ふふふ……そうよ、勝手な思い込みで行かせてもらうわ。さあ、兄さんの精を受けて、あなたはどんな顔をするのかしら？」
「い、いいかげんにしろ！　そんなことは……絶対にダメだっ！」
達してしまわないように快感と戦っていたのか、口数が少なくなっていた煉が叫ぶ。
実を言うと煉は、杏樹の膣内を強引に味わわされ、その快感の強さに面食らっていた。肉親というのは、こんなにも相性が良いものなのか――そう考えて、必死にその説を払いのける。認めてしまえば、妹の体しか抱けなくなってしまいそうな、そんな気がしてしまうから。
「杏樹……お、俺は……ッ！」
必死の抵抗も、やはり限界を迎えてしまう。血と蜜にまみれた杏樹の粘膜は亀頭をネットリと包み、無数の肉ヒダで摩擦する。ひと回り大きく膨張したペニスの先端から白濁が噴き出し、煉はいつもとは違う少年のような声を上げた。
「あうっ！　あ……杏樹……杏樹ッ!!」
「あ……熱ッ！　に、兄さ……んくぅっ！」
ただでさえ狭い杏樹の膣内で煉の精液は居場所なく溢れ返り、桃色に上気した尻にドロリと朱の混じった白い川を作る。
「ふ……ふふふ……どう？　女としての幸せを感じたかしら？　そんなはずないわ！　愛なんて……愛なんて幻想なんだから――」
迷いを振り払うように言葉を吐き出す悪霊。その背後から不意に黒い影がチラリと映る。
「おい、ジェニファー！」
「え？」
人形がカランと音を立て振り向いた瞬間、杏樹の瞳が部屋の隅へ合図を送る。その瞬間、物陰から一匹のコウモリが飛び出し、人形に貼り付いた。
「なっ……このっ！」

「ジェニファー……あなたの罪、私の元で収めます。今は……お眠りなさい……」
息を切らし、途切れ途切れながらも、杏樹は封じの言葉を絞り出す。本来の姿通り、糸の切れた人形となったジェニファーは、カチャリと体を崩し、ピクリとも動かなくなった。
「封印……できたのか？」
「ええ……名前を知る必要があるから、遅くなってしまったわ。もっと……力を付けないと」
ようやく、部屋の空気がひんやりとしていることに気付く。そんな冷気が、汗と唾液にまみれた乳首を撫で、杏樹は小さく震える。短い溜息をつくと、不意に通常モードに戻っていた。火照った肌とズクズクと蠢く痛みをあらためて感じ、思わず照れが顔に出てしまう。
「あの、兄さん……そろそろほどいて欲しい……のだけど……」
「む……うあ、わ、悪い！」
ハッと我に返った煉は、密着した腰を慌てて離す。萎えきっていないペニスがズルリと抜け落ち、プチュッといやらしい水音と共に、残った精液が流れ出る。抜いた瞬間、最後の痛み――杏樹はキュッと唇を噛み、処女でなくなったことを実感する。
吸血鬼として一人前になる前に、女になるなんて――そんなことを考えながら、クスッと微笑む。そんな杏樹の表情は、どことなくホッとするようにも見えた。
「くっ……この……結構キツく結んであるな。すまん、もう少し我慢してくれ……」
不器用丸出しの煉は、いつまでも足の戒めに悪戦苦闘している。それを眺める杏樹は、相変わらず胸と秘部を顕わにしたままの恥ずかしすぎる格好のままだった。何か掛けてやればいいのだが、焦っている煉の頭の中に、その気遣いはなかった。
恥ずかしいのは当然なのだが、兄の体面を守るため、杏樹は言葉を飲み込みジッと待っていた。ジンジンと痺れるような感覚は、いまだに腰全体を支配している。いつもと変わらない表情を見せながら、杏樹はただただ天井を見上げる。
「杏樹……その……本当に悪かった」
「兄さんは何も悪くないわ。元はと言えば、私が彼女を連れてきたのが原因なのに……そんな風に思わないで」
「いや、しかし……と、とにかく、これからお前のことを、今まで以上にサポートしていく。何でも……俺に言えよ」
「……はい……」
それなら……外では食事だけにしてもらって、エッチなことはしないように言ってみようかしら。そんなこと、まず無理だと思うけど。それよりもまず、兄さんはもう私を抱こうとは思わないだろう。でも、何もなかった頃からすれば……可能性は高いのかもしれない。
「……ふふっ」
「杏樹？　なに笑ってるんだよ」
「ううん、何でもないわ。それより――」
首をドア側へツイと向けると、サッと黒い影が隠れる。
「ブギーくん……彼女の名前、知っていたの？」
「い、いや……最初は判らなかったんだけどさ。なんとなく、こんなタイプの呪いの噂があったのを思い出してな。感謝しろよ、杏樹」
どこかビクつくようなブギーの声。やはり、杏樹には逆らえない何かがあるようだ。
「それは感謝しているけど……あなた、いつから見ていたの？」
「いやー……杏樹の処女喪失シーンなんてものを見ることができるとは思わなかったぜえ。しかも煉兄とラブラ――」
「……ブギーくん」
震えた空気を氷の粒に変えそうな音。そんな杏樹の声に、煉は部屋の空気が何倍にも重くなったような気がした。
「お、俺……体の方に戻ってるぜ。ま、また後でな」

ブルブルと震えるような声を残し、ブギーの気配が消える。細く長い溜息を吐く杏樹に、煉としても掛ける言葉を失ってしまう。だが、ひとつだけ確認しなければならないことがあった。

「その、なんだ……杏樹？　これだけは訊いておきたいんだが……」

吸血鬼の受精率は低い。だが……マーカー家はその世界にあって驚異的な子宝に恵まれている血筋である。まさか――と思いつつも、煉としては気が気でない。

「その……杏樹は……アレ、来てるのか？」

「……」

杏樹の表情は変わらない。ぼんやりとした瞳にジッと見つめられ、煉の中では何十分も経ったかのように感じていた。コクリと喉を鳴らし、目を逸らそうかと思ったその時、杏樹は可愛らしい微笑みを浮かべて唇を開く。

「秘密だって……言ったでしょう？」

はい、茉森です。本当にヤヴァいスケジュルです。まちがって行数オーバーしてしまい、こんなコメントで失礼します。いやー、杏樹ですね杏樹。あの目つきがたまりませんね！　そして、「兄さん」ですね。性格悪いですが、杏樹には優しいんですよねー。杏樹はあれで家族のことが大好きなので、こんなifがあってもいいかと……。かげさき先生に怒られたらどうしよう（汗）本当にキャラが好きで描いてるので許して下さーい！　本編ではラブ担当かりんーんですけど杏樹や麻希にもゼヒ！　まあ、単純に杏樹の出番増えると嬉しいです（笑）そんなわけで、読んでない方がいましたら、「かりん」読んで下さいね。同人誌とかもっと見たいんですけど！　ウチら、今回これ以外に描きたい作品なかったくらい、これが一番なわけですよ。よろしくよろしく！

茉森晶

この杏樹(茉森作)と
左のかりん(逸樹作)は、
アニメ化お祝い本の時の
イラストです～

■あとがき■

さてさて、楽しんでいただけたでしょうか。
私としては、あまりに絵が描けなくなっていて、
ちょっとヘコみました(苦笑)　それでも、新鮮な気持ちで描けたので
また少しづつ練習していけたらなー、と思います。

逸樹はまた逸樹らしい漫画ですね。君、ラブラブしてたらええと
思って！　雨水君の性格と生い立ちを考えて「避妊は必要だろう」と
二人で話してましたねー。あんな本当の意味での真面目な男の子が、
エロゲー界にももっと必要かもです。もちろん、若気の至りという
描写をキッチリ描くということならまた別ですが。
ウチはどっちもやってますよ！

Ｑ－Ｘの近況としましては…『姫さま凛々しく！』ビジュアルファン
ブックが晋遊舎様から出ます！　前回、手際の悪さであまりに時間が
かかってしまったので、現在、必死になって作業してますよ。
ドラマＣＤも進めてます。これがまた楽しみなんですよねー。
ホームページではキャラ人気投票もやってます。上位以外のキャラ
票も楽しみに見てますので、票数は気にせずお好きなキャラを
応援してあげて下さいね。不正投票は後で整理する予定ですし、
何があるか判らないかも～？

後はとにかく、10月９日の『きゅーふぇす』！
こんなめでたいことはそうそう無いです。Ｑ－Ｘ気に入って
くれてはる皆さん、川崎市産業振興会館でお会いしましょう！
さて…準備をしていかないと。

お仕事も趣味も真剣に頑張っていきますので、今後ともＱ－Ｘと
はぁと饅頭マニアをよろしくお願いします！　ではでは。

■鼻血以外で出血中！■

発行　：　はぁと饅頭マニア

発行日　：　2006年8月13日

即売会価格　：　200円

印刷　：　ホープ21様

いつもお世話になってます！

禁81

吸血鬼の恋人

!中出し吸血鬼